

文明開化期の「近代的啓蒙」像再考

——福沢諭吉の検討を通じて——

谷口眞子

はじめに

かつて近代化論においては、日本がいかにして「近代」へ離陸できたのか、他の東アジア諸国との違いは何かなどが問われてきた。そして、江戸時代における高いリテラシーやプロト工業化の進展などとともに、洋学（ここでは蘭学・洋学を一括して洋学とする）を通じた西洋文明の受容が、明治の近代化に寄与したと指摘されてきた。事実、洋学の関心は天文学、医学、植物学から、軍事技術や法制・政治・経済など、さまざまな分野に及んでいた。

ただし、西洋文明という文明史観については、そのバイアスを考慮する必要がある。欧米諸国では、文化的に劣るとみなしたアジア人やアフリカ人を文明化する使命があるとする、「文明化の使命」言説が存在した。⁽¹⁾しかし、「the West and the Rest」（＝西洋中心主義）の偏見を認識し、「文明」を相対化する見方は、日本史学に

おいて十分に咀嚼されているとはいえない。ペリー来航以後、西洋「文明」に本格的に触れた日本が、洋学者らをはじめとしてその摂取に尽力し、近代国家を形成したという語りの中で、自由や平等、議会制や共和政の理想・理念が、思想レベルの言説としてだけではなく実現していたとみなされ、日本の「文明」度が対比的に述べられる傾向はまだ続いている。さらにそれは、学問分野における、儒学・国学に対する洋学の挑戦としても理解されている。

実際には、幕藩体制の政治的・社会的・思想的枠組みの元で教育を受け、特に洋学を学んでいなかった人々でも、外交交渉などで外国人と渡り合っており、「文明」国の言いなりになっていたわけではない。幕末維新期の尊攘派公家、沢宣嘉は明治二（一八六九）年、箱館戦争の事後処理に関する「万国公法」の解釈をめぐり、外務卿としてフランス公使ウトレーと激しい応酬を交わしている。⁽²⁾また、江戸時代末期の万延元（一八六〇）年に、日米修好通商条約批准書交換のためアメリカに派遣された副使の村垣範正は、国会議事堂で

議員が意見を述べる風景を見学し、「大音に罵るさま、副統領の高き所に居る鉢杯、我日本橋の魚市のさまによく似たりと、ひそかに語合たり」と『航海日記』に記し、議事堂での議論が魚市場のセリのような⁽³⁾、と冷ややかに評している。ましてや、幕末維新期に西欧へ留学し、現地でその実態を知った人々は、思想としての言説と実現可能な方策とを区別していた。彼らが帰国後、二五〇年以上にわたる幕藩体制をいかに変革して、新たな政体への道を開いていけると考えていたのかを、同時代感覚から改めて考察するためには、我々が持っている「文明」観を今一度検討する必要がある。

そこで本論文では、福沢諭吉―近年では「福澤」ではなく「福沢」と書くほうが一般的なので、書誌情報以外の表記は「福沢」で統一する―に着目し、福沢の著作と出版事情、「学者職分論」をめぐる福沢と他の明六社メンバーとの議論、福沢の翻訳論・文体論から、幕末維新期の言語空間の一端を明らかにして、文明開化期における「近代的啓蒙」像を再考したい。

第一章 福沢諭吉を通じた「近代的啓蒙」像の形成

明治初期の西洋文明・啓蒙思想の普及を語る際、もっとも言及されるのは福沢諭吉（一八三五―一九〇二）である。福沢は大坂の津藩蔵屋敷で誕生し、緒方洪庵の適塾に入門して蘭学を学んだ（のちに英学に転向）。万延元年、咸臨丸で渡米したのを皮切りに、文

久二（一八六二）年には、幕府遣欧使節団の一員としてヨーロッパを歴訪、慶応三（一八六七）年には幕府遣米使節に随従した。『文明論之概略』をはじめとする多数の著作は、平易な文体・文章で書かれている。『学問のすゝめ』初編（一八七二）七六年刊行）について福沢は、初編の正版が二〇万の発売部数であり、毎編二〇万として一七編で三四〇万冊が売れたことになる、と略算している。⁽⁴⁾

現代に至るまで福沢が広く知られているのは、慶應義塾から多数の門下生が輩出され、繰り返しその著作が出版されてきたことも関係している。生前の明治三一（一八九八）年、福沢自らが編纂した『福澤全集』全五巻が、時事新報社から刊行された。大正一四（一九二五）―一五年には『福澤全集』全一〇巻が国民図書から、また昭和八（一九三三）―九年にはその続編にあたる『続福澤全集』全七巻が、岩波書店より出版されている。編纂にあたったのは、どちらも石川幹明だった。石川は水戸藩士の三男として生まれ、慶應義塾で学んだあと時事新報社に勤務し、社説を担当していた人物である。彼は『福澤全集』『続福澤全集』の編纂にたずさわりながら、自身も『福澤諭吉伝』全四巻（岩波書店、一九三二年）を執筆している。さらに、慶應義塾創立一〇〇周年記念出版として、昭和三三（四六年）にわたり、慶應義塾編纂『福澤諭吉全集』計二三巻（二一巻と別巻）が、岩波書店より出版された。編纂者の一人、富田正文も水戸出身で、慶應義塾大学卒業後は職員として勤務し、先述した

石川幹明『福澤諭吉伝』の完成に尽力し、自身も福沢研究に従事した。近年では福澤諭吉『福澤諭吉著作集』全一二巻が、平成一四（二〇〇二）～一五年にかけて、慶應義塾大学出版会より刊行されている。このように明治・大正・昭和・平成の各時代に著作集が編纂されているのである。「慶應義塾一五〇年史料集 別巻2」として刊行された、福澤諭吉事典編集委員会編『福澤諭吉事典』（慶應義塾大学出版会、二〇一〇年）は、一〇〇〇頁を超える大部の事典であり、福沢研究は頂点を極めた感がある。

さらに福沢の出身地である大分県中津市においても、福沢の顕彰は盛んである。福澤諭吉旧居に隣接する福澤記念館では、福沢の一生をたどるとともに、小幡篤次郎や中上川彦次郎をはじめ、実業界などで活躍した慶應義塾出身者が数多く展示されている。また慶應義塾福沢研究センターでは、福澤諭吉、慶應義塾、慶應義塾出身者・関係者の資料収集・調査が蓄積されている。慶應義塾を核とする盤石な土台と広い裾野の上に、福沢研究が推進されていると言えよう。

こうして、教育者として影響力を持ちつつ、「文明開化の顔」として、また政府批判を『時事新報』などで発信し続けた在野の「意見番」として、福沢は幕末維新期の洋学者の中でも飛び抜けて注目され、想起され、評価されてきた。もっとも、明治二〇年の保安条例発布時には、同条例による退去者名簿の筆頭に名前が挙がり、「明治政府は福澤没後、一度にわたって福澤に対する贈位を企画し、いずれも挫折するが、その際も、評価の対象とされたのはあくまで

幕末維新期の啓蒙思想家としての実績や経済思想家としての事績であり、その政治思想が積極的に評価されることはなかった」という⁽⁵⁾。明六社が文明開化の最盛期と言われ、福沢の名前を誰もが思い浮かべるのは、このような事情が関係しているのかもしれない。

福沢とは対照的に、学問的研究対象としてさほど重視されてこなかった洋学者に、津和野藩出身の西周（一八二九～一八九七）や、津山藩出身の津田真道（一八二九～一九〇三）がいる。二人は藩を飛び出して洋学を学び、蕃書調所教授手伝並、同手伝を経て、開国後の文久二年（慶応元年）にオランダへ留学し、ライデン大学のフィッセルング教授から、五教科と最新のヨーロッパ情勢について学んだ。帰国して開成所教授職につき、幕藩体制崩壊後は静岡藩で、西周は沼津兵学校頭取、津田真道は静岡学問所頭取をつとめる。その後、新政府の官僚として活動し、のちに元老院議員、貴族院議員になった（津田は衆議院議員も経験している）。二人とも福沢と同じく明六社の一員で、『明六雑誌』に多くの論考を発表し、東京学士会院会員でもあったが、一般にはあまり知られていない。藩士から幕臣、静岡藩を経て新政府の官僚、議員という履歴もあって、これまで歴史学の中で過小評価されてきたのである⁽⁶⁾。

その点では勝海舟（一八二三～一八九九）や榎本武揚（一八三六～一九〇八）も、業績に比して評価が高いとは言えない。石高四一石余りの旗本の家に生まれた勝は、西洋兵学を学び、戊辰戦争では江戸の無血開城実現に貢献した。維新後、静岡藩勤務を経て参議兼

海軍卿、元老院議員、枢密顧問官などを歴任している。また榎本武揚は、西・津田とともにオランダへ留学して自然科学や法学を学び、江戸開城後、軍艦の引き渡しを拒否して蝦夷へ渡り、箱館戦争で新政府軍に降伏した。出獄後、海軍中将兼特命全権公使としてロシアに赴き、樺太・千島交換条約を締結し、海軍卿、清国駐在全権公使を経て、通信、農商務、文部、外務の各大臣をつとめた。

しかし、福沢は『瘦我慢の説』で、勝海舟が「維新の朝に曩^さきの敵国の士人と並立て得々名利の地位に居る」ことを非難し、旧幕府軍が干戈を交えないまま降参したのは、三河武士の精神に背くだけでなく、「日本国民に固有する瘦我慢の大主義を破り、以て立国の根本たる士気を弛めたるの罪は遁るべからず」と批判した。そして「政府の寵遇を辞し、官爵を棄て利禄を抛ち、单身去てその跡を隠すこと」を求めた。榎本武揚については、箱館戦争での「天晴の振舞」、新政府での特派公使、大臣昇進を喜ばしいとしながら、箱館戦争での敗北は政治生命の終わりと同じなので、戦死者の霊を弔い、戦争責任をとったことを明らかにするのが「士流社会の風教上に大切なことなるべし」と論じた。要するに、「二氏（勝と榎本のこと―筆者注）共に断然世を遁れて維新以来の非を改め、以て既得の功名を全うせんことを祈るのみ」と断じたのである。⁽⁷⁾ 坂本多加雄はこの福沢の言葉を、武士としての生きざまを求めた言説ととらえている。しかし、幕藩体制への批判と武士道称揚とが福沢の中でどのように結びついているのか、判然とし⁽⁸⁾ない。ともあれ、福沢が勝海

舟を批判したことはよく知られている。

このように、福沢がわかりやすい言葉で語る批判は、幕藩体制を専制的な暗黒の封建時代とし、西洋文明の受容による近代化が薩長を中心に実現したとする図式には、都合のよいものであった。「門閥制度は親の敵で御座る」（明治三年刊行『福翁自伝』）という言葉が有名であること自体、それを示している。

ただし、福沢の旧体制批判をとりあげる際、執筆と公表・刊行時期がしばしばずれていることに、注意しなければならない。福沢は明治一〇年五月に執筆した『旧藩情』で、上士と下士の格差をはじめ、旧体制を痛烈に批判した。ただし、公表されたのは福沢の死後、三四年六月の『時事新報』連載で、単行本として刊行されることなく、大正期の『福澤全集』に収録されている。また『旧藩情』と同年に執筆した『明治十年丁丑公論』は、西南戦争の西郷隆盛を擁護した作品だが、これも出版されず、世間に公表されたのは三四年二月の『時事新報』で、連載中の二月三日に福沢は亡くなっている。『瘦我慢の説』は二四年一一月に脱稿して、数通の写本が作られ、福沢は翌年二月に勝と榎本らにこれを示した。ところが、二七年に一部の内容が世間に漏れ、三三年に『日本人』が著者名を伏せて紹介したため、三四年一月に『時事新報』に連載された。『明治十年丁丑公論 瘦我慢の説』は、福沢死後の三四年五月、初版本が時事新報社より刊行された。⁽⁹⁾ つまり、これらの旧体制批判はいずれも、福沢の死去直前、直後、あるいは死去をはさんで公表されたことに

なる。大日本帝国憲法が公布されたのは二二年、翌年には貴族院と衆議院による二院制の第一回帝国議会が開会されているので、それから一一年も経ってからのことであり、旧体制を批判して新しい体制作りに寄与したという文脈では語れない。

もっとも、福沢から明治二五年に原稿をみせられた時の勝と榎本の返書はおもしろい。福沢は、過日「瘦我慢之説」と題した草稿を書き、いづれ時節を見計らって公表するつもりであるが、事実関係など誤りがないか、立論について意見はないかなどと二人に尋ねた。「多年來心に積然たらざるものを記して輿論に質し、天下後世の爲めにせんとするまでの事」と書いている。それに対して勝海舟は、「行蔵は我に存す、毀誉は他人の主張、我に与らず我に關せずと存候。各人え御示御座候とも毛頭異存無之候」と応えている。出処進退は自分によるが、毀誉褒貶は他人によるものであり、自分が関与するところではないとして、人に見せてもまったく異存はない、というのである。また榎本武揚は、「昨今別而多忙に付いずれその中愚見可申述候。先は不取敢回音如此に候也」と書いている。最近はこのほか多忙なため、そのうち自分の意見も述べるが、とりあえずお返事します、とのことであった。⁽¹⁰⁾二人とも正面切って、福沢を相手にしていないことがわかる。

近年の研究で明らかにされているように、福沢が述べるほど幕末の日本は専制的・封建的ではなかった。家臣団に上下の別があるとはいえ、西洋砲術を学ぶという理由で内地留学も許され、學術を身

につけた者は、下士であつてもその能力ゆえに召し抱えられる可能性があつた。民衆支配という点でみても、中間支配層が民衆の意見も取り入れて、幕領・私領の運営を行っていた。

また、実際の戊辰戦争は敵味方に分かれたとはいへ、日本という国の政体をめぐる戦いであつた。日本列島を取り巻く当時の世界情勢を、榎本や西・津田をはじめ、森有礼たち留学組はある程度理解しており、彼らはその中で、どのように国制を構築するか模索していた。その例を「学者職分論」で検討しよう。

第二章 「学者職分論」をめぐる議論

明治七年一月刊行の『学問のすゝめ』第四編で、福沢が「学者の職分を論ず」と題する論考を発表し、それに対して他の明六社のメンバーが反論した「学者職分論」はよく知られている。明六社の当初の会員は、箕作秋坪・西村茂樹・杉亨二・西周・津田真道・中村正直・福沢諭吉・加藤弘之・箕作麟祥・森有礼の一〇名だった。しかし、他の会員がほとんど官僚であることに不満を持った福沢は、政府による啓蒙専制では人民の自由独立が達成できないと主張したのである。福沢の意見をまとめれば、次のようになる。

人民と政府はそれぞれの分限を尽くし、助け合つて独立を維持しなければならぬ。日本が諸外国に及ばないのは學術・商

業・法律であり、このレベルが上がらないと国は独立できない。しかし、専制政府と無知文盲の愚民しかない。人民は「数千年専制の政治」に苦しめられ、「卑屈不信の気風」を帯びている。「かの誠実なる良民も、政府に接すれば忽ちその節を屈し、欺詐術策をもって官を欺き、嘗て恥じる」ところがない。⁽¹¹⁾

福沢は、人民の目標となるべきは「一種の洋学者流」のみだが、彼らは官僚になることを考えていると断じ、日本では「中人以上の地位にある」自分が、「愚民の先をなすのみならず、またかの洋学者流のために先駆してその向かう所を示」し、「天下の人に私立の方向を知らしめんとする」と宣言して、自らが先頭に立つ決意を表明した。⁽¹²⁾

この、あからさまな挑発に対し、政府関係者である加藤弘之、森有礼、西周、津田真道らが反論したのは当然だろう。福沢が言う「学者」とは、現代の研究者よりも広い範囲を指しており、漢学や洋学を修めて学術的文章を書ける知識人のことを指している。彼らの反駁文は『明六雑誌』第二号（明治七年三月刊行）に掲載された。⁽¹³⁾

加藤弘之（一八三六―一九一六）は出石藩の兵学師範の長男で万延元年、蕃書調所教授手伝となった。西や津田の同僚である。慶応四年に幕府の大目付となり、明治元年に新政府へ出仕、政体律令取調御用掛に任命され、その後、会計権判事、学校権判事、大学大丞、宮内省侍読、文部大丞、外務大丞とこなし、五年に宮内省四等出仕、

七年に左院の一等議官に任じられた。⁽¹⁴⁾ 加藤は「福沢先生の論に答う」と題する文章で、福沢の論は国権を縮小して民権を拡張しようとする論だが、これが極端になると国権が衰弱し、国家が成り立たなくなるとして、「国務も民事もともに肝要たれば、洋学者たる者その才その学にしたがいて、あるいは官務に従事する者もあり、あるいは私業に従事する者もありて、偏せざる方可なるべしと思うなり」⁽¹⁵⁾と述べ、官民両方が重要なのであり、洋学者はどちらかに偏ることなく、さまざまにその才能を活かせばよい、としている。

森有礼（一八四七―一八八九）は薩摩藩士の五男で、造士館で漢学、藩の洋学校の開成所で英学講義を受けてイギリスへ留学し、アメリカから慶応四年に帰国した。明治三年、少弁務使としてアメリカに在勤、六年に帰国して明六社を結成する。⁽¹⁶⁾ 森は「学者職分論の評」で、政府と人民を対立的にみるのは欧州諸国にもなく、学者が在野で国家独立のために事業をなすという、福沢の私立為業に従えば、学者は皆官途を去り、不学の者に政府を託すことになるとして、国権と民権を対立的にみることに警鐘を鳴らした。⁽¹⁷⁾

津田は「学者職分論の評」で、政府は精神、人民は身体であり、精神と身体で人身が成っているように、政府と人民が相合して国家が成り立つと述べている。私立の気概がある人民が少ないことは確かなので、「力を尽して人民自由自主の説を主張して、たとえ政府の命といえども、無理なることはこれを拒む権あることを知らしめ、自主自由の気象をわが人民に陶鑄（とうさう、感化すること―筆者注）するは

我輩のおおいに望むところなり。このことは、在官、私立にかかわらず、おのおのその地位にしたがい、その人相当に尽力すること出来べきなり」と論じた⁽¹⁸⁾。人民の自主自由を重んじているところが、加藤や森よりも福沢に近いが、官民にかかわらず学者それぞれが尽力することで、人民の感化が実現できると考えている点が、在野・私立に偏った福沢の見解と異なっている。

もっとも長い文章を寄せたのは、西周であった⁽¹⁹⁾。西は「非学者職分論」で、洋学者も政府の仕事につく者と私立する者の両方がありうるとしながら、末尾で「ただ余のごときは、いささか翻訳の小事をもつて政府に給仕する者、もとより万一に補なきを知るゆえに、久しく先生の高風を欽慕す。今いまだ、にわかに決然冠を掛る能わずといえども、早晚まさに驥尾に附かんとす」と謙遜していることから、これまで西が本意ながら官僚として勤めていたと考えられてきた。しかし、西から福沢に宛てた明治四年二月一三日付けの書簡からは、「ご挨拶」の意味合いがあつたことがわかる⁽²⁰⁾。

西は、日本の独立が危うく学者は私立してこれを維持すべきという論は、論理学的根拠のない詭弁であると喝破した。そして政体を変えるのは時間を要する事柄であり、人民に対する急進的で過激な啓蒙運動は、むしろ害になると指摘する。西洋學術の蘊奥を極めた大家先生なる者はいない、というくだりは、「中人以上」を自負する福沢への皮肉ともとれるが、より深い意味があると考えられる。西はかつて津和野藩主から、学者として大成するよう命じられたこ

ともあり、明治七年、西洋哲学に関する講義を『百一新論』でまとめ、のちの『百学連環』に結実するような学問体系そのものの構築を目指していたからである（先に言及した「翻訳の小事」という表現も字面通りに受け止めてはいけないことがわかる）。また、数巻の書を読んだだけで官途を志す風潮への批判については、学資金がなく生活に追われているのに加え、洋書が読める人が求められているからである、とも述べている⁽²¹⁾。当時は洋学塾が次々と現れ、外国語学校も建てられ始める頃だった。政治・経済・法制に関する外国語からの翻訳需要が高まる中、かつての武家家臣を中心に、外国語を学んで官吏を目指そうとするのは、無理からぬところである。

近世後期の江戸では、寺子屋の師範番付が印刷されるなど、教育熱は高まっており、三味線や書道などいくつもお稽古事を習って、江戸城や大名家の女中になる女子もいた。識字率は世界的に高かったとも言われる。とはいえ、寺子屋で学んだ庶民の読み書きそろばん能力と、漢文素読から始まる武士階層の教育レベルには、格段の差がある。後者のような教育を、下級武士や庶民も学べる機会が増えたことは事実だが、民間社会全体を底上げするには時間がかかることは容易に想像できる。自由・自主独立の精神の重要性と、それをどのようにして庶民に広めていくかは、別の問題であろう。

「学者職分論」について平山洋は、「加藤・森・津田らの意見は、学者は政府の中でこそ役立つ、というものであった」「加藤は、福沢の学者職分論を民権対国権の図式で捉え、洋学者が在野で活動す

ると民権が伸長しすぎるのでよくない、と憂慮を表明する」「西の抱く学者のイメージとは、研究室にこもって勉強を続ける大学教授のそれであった。ところが、英米系の学問を修得していた福沢は、学者の範囲を教養ある知識人にまで広げて理解していたので、彼らが社会全体へ貢献するのは当然だと考えていた」などと述べている。⁽²²⁾原文と対照してみると解釈に齟齬があるように見える。『学問のすゝめ』四編の附録に「本論につき二、三の問答あり」として、福沢が明六社での議論に回答した内容が掲載されているので、それに影響された可能性もある。福沢の回答は、①文明を進めるのに政府の力に頼るべきではない、②有力な人材が政府から離れると支障を来すというが、政府の事務を減らせば官員は少なくともよい、③「私立」の人間が集まることで政府の権力が低下することはない、④学者で天下を憂う者は「無芸」ではないのだから、官を離れて生計の道が立たないということはなく、もし官の事務についている方がたやすく利益を得られるのであれば、「その利益は働きの実に過ぎたるものと言うべし。実に過ぐるの利を貪るは君子のなさざるところなり。無芸無能、饒倖に由って官途に就き、慢に給料を貪って奢侈の資となし、戯れに天下の事を談ずる者は我輩の友に非ず」という過激なものであった。⁽²³⁾

実は次の章で述べるような当時の言語空間からすれば、福沢の主張を実現するのが前途多難であったことは目に見えていた。松沢弘陽は、『文明論之概略』からわずか四年後の明治一二年に書いた『民

情一新』で、進取の偏重から生じる士族・書生らの急激な民権運動の展開を警戒する姿勢が福沢にみえる、と指摘しており、官民を対立的にとらえる考え方は、福沢の一貫した思想ではないと考えられよう。⁽²⁴⁾事実、福沢は東京府会議員の経験から、一一年～一二年にかけて『通俗民権論』『通俗国権論』『国会論』を発表したあと、民権運動高揚にともなう警戒心から、一五年には「不偏不党」「官民調和」を掲げた日刊紙『時事新報』を創刊するに至る。

そもそも、機関誌の『明六雑誌』が明治七年四月に創刊される二ヶ月前に、福沢は一般民衆の思想啓発をねらった『民間雑誌』を、慶応義塾出版社から刊行し始めている。政府が八年六月に讒謗律と新聞紙条例を制定し、七月に官吏が政務に関する事項を新聞紙などに発表することを禁じると、福沢は九月に『明六雑誌』の廃刊を提案し、『明六雑誌』は一一月に終刊、明六社もほぼ同時に活動を終えた。⁽²⁵⁾明六社の活動期は、明治啓蒙思想と文明開化の最盛期であると言われるが、その実、七年二月～八年一月の二年にも満たない期間だったのである。

明治六年の政変で、板垣退助・副島種臣・江藤新平・後藤象二郎らは参議を辞職し、大久保利通は「立憲政体に関する意見書」を起草した。翌年一月に、板垣や江藤らは民撰議院設立建白書を左院に提出するが、これは官民対立というより君民一体の政体をどのような作るかという問題である。この年、政府は台湾出兵をめぐる揺れ動く中、左院に国憲編纂を命じている。先の四人の反論は、官民

両分野で洋学者による啓蒙を認めつつ、政府、「官」なるものを作って国家体制を整備しなければ、事は始まらないと考える点で一致していたが、右のような当時の状況を考えれば納得がいく。個人がいくら頑張っても、政治体制が確立しなければ、その能力を十分に發揮できない。江戸時代には制度化された「行政」がなかったため、行政システムを構築するには多大な努力を要したのであり、これまでの研究はその点への理解が足りなかったと言えよう。ある程度、平準化された一般社会での官民対立ではなく、そもそもそのような社会が存在しなかったのが江戸時代であり、下級の幕臣や藩士が自らの見解を自由に述べられるようになったのが、まさに幕末維新期の公議公論世界なのである。

その世界が現代と比べていかに異なっていたのかは、明治初期のリテラシーをめぐる次のような状況を考えて理解できる。

第三章 福沢諭吉の翻訳論と文体論

『福澤諭吉全集』は明治三一（一八九八）年に全五巻が刊行されたが、それに先立ち『福澤全集緒言』が三〇年に時事新報社から出版された。緒言は『全集』に収録された著書・訳書をめぐり、福沢自身が執筆した解題である。その中で、大坂の適塾で洋学を学んだ福沢が、江戸の洋学を嫌悪していたことが書かれている。

福沢の文章が平易で読みやすい理由の一つは、師の緒方洪庵の考

え方にあった。当時、「東西学問の両大関」と言われていたのが、大坂の緒方洪庵と江戸の杉田成卿である。緒方洪庵（一八一〇～一八六三）は坪井信道、宇田川玄真、さらに長崎に学び、大坂で適々斎塾（適塾）を開いて、医業のかたわら蘭学を教えていた。入門者は大村益次郎、佐野常民など、三〇〇〇人を超えたと言われる。文久二年、江戸の奥医師と西洋医学所頭取になったが、翌年五四歳で急死した⁽²⁶⁾。杉田成卿（一八一七～一八五九）は坪井信道に学んだあと幕府天文台訳員となり、蘭書の翻訳にたずさわってカルテンの『海上砲術全書』などを翻訳した。小浜藩酒井家の侍医となるが、嘉永六（一八五三）年にはアメリカ船・ロシア船の応接、文書取調にあたった。翌年、天文台を辞めて西洋砲術書の訳述に専念し、安政三（一八五六）年には蕃書調所教授に任命された⁽²⁷⁾。

福沢によれば緒方は、原書が読めない者のために翻訳をするわけだから、原書に拘泥することなく、無用の難字・漢字を用いず、原書と対照しなくても訳書が読めるような文章にするように教えた。辞書類で調べることはせず、世間に出回っている節用集で事が足りるようにせよと忠告したらしい。難字を使わず平易な著書・訳書を中心がけたのは、緒方洪庵の教えによるものであり、「今日に至る迄無窮の師恩」に感謝しているという。ところが、江戸の杉田成卿は、「用意周到、一字一句を苟もせず原文の儘に翻譯するの流義なれば、字句文章、極めて高尚にして俗臭を脱し、一寸手に執りて読下したるのみにては容易に解す」ことができなかつたという⁽²⁸⁾。ちなみに、

杉田門下の吉田拙蔵による「成卿先生之逸事」には、「先生ノ書ヲ訳スル別ニ草稿ヲ須イズ初ヨリ罫系ノ用紙ニ登壇シ以テ割劔ニ付スルヲ常トセリ」とあり、翻訳は草稿を作らず、直接罫線用紙に書いていたことがわかる。⁽²⁹⁾

福沢は、「江戸の洋学社会」の訳書は、仮名交じりの文体ではあるが、次のような問題があると指摘する。

漢語を用いて行文の正雅なるを貴び、之がために著訳者は原書の文法を読破きて文意を解するは容易なれども穩当の訳字を得ること難くして、学者の苦みは専らこの辺に在るのみ。その事情を丸出しに云えば、漢学流行の世の中に洋書を訳し洋説を説くに文の俗なるは見苦しとて、云わば漢学者に向て容を装うもの、如し。蓋し百年來の翻訳法なれども、斯くては拙も今日の用を弁ずるに足らざるを信じ、依て窃に工風したる次第は、漢文の漢字の間に仮名を挿み俗文中の候の字を取除くも共に著訳の文章を成すべしと雖も、漢文を台にして生じたる文章は仮名こそ交りたれ矢張り漢文にして文章を解するに難し⁽³⁰⁾

漢文としての品格を尊重するため、原書を読んで文意を理解することはできても、それに対応する翻訳語をどうするかに苦しんでいると指摘した上で、そこには学者ならではの裏事情があると、福沢は考えていた。漢学流行の世の中で、洋書を翻訳し洋学を説くに際し

て、俗文では見苦しいという、漢学者の存在を意識した翻訳だからであるという。もちろん、これでは時代の要請に応えることはできないので、漢文の漢字の間に仮名を挿入し、俗文の「候」を取り除いたわけだが、漢文を土台にした文章なので、仮名が交じったところでやはり漢文は漢文であり、文章を理解するのが難しい、と手厳しい。

そこで福沢は、「兎に角に通俗に分りさえすれば夫れにて宜しとして態と無頓着に附し去り、要は世間の洋学者を磊落放胆に導き漢学を蔑視せしめんとしたる臨機一時の方便」を考えた。すなわち、通俗的でわかりやすい言葉で書くことにより、漢学を見下すようにもつていこうとした、と書いている。⁽³¹⁾

ただし、福沢が江戸に出てきたのは安政五年の冬で、杉田成卿が死去する数ヶ月前のことであり、福沢は一度も杉田成卿に会っていない。しかし、杉田の名前は長崎や大坂でも知られており、江戸から来る者がいれば、杉田はなんと言っているかと問うのが、蘭学生の方だったという。当時の蘭学者の多くが医師であった中、杉田成卿の「当時読書推理ノ一点ニ於テ蘭学者中ノ鬼神トシテ仰ガレタル者ハ独リ先生ナランノミ」だったと、明治一八年四月四日に、芝公園の紅葉館で杉田成卿二十七回忌の祭典が行われた際の演説で、福沢は回想している。⁽³²⁾

江戸時代における学術的文章は漢文で書くのが通例であった。たとえば、吉良邸討ち入りの前に、赤穂浪士の大高源五が母親に宛て

た手紙は、漢字仮名交じり文で書かれた名文として知られているが、儒学者の室鳩巢はわざわざこれを漢文に直し、『赤穂義人録』で赤穂事件を論じている。⁽³³⁾ このように知識人の書き言葉は漢文であった。

当時の洋学者は漢文の素養を前提として求められた。大村益次郎が西洋兵学を学びたいと言ったとき、まず儒学の素養を身につけるよう忠告されて、広瀬淡窓の咸宜園に学んだのはその例である。⁽³⁴⁾ 学術用語は基本的に漢語であり、そこにはないものは造語したのである。

福沢が幕臣から新政府に出仕した洋学者を過小評価する傾向を指摘したが、それは履歴のみならず、文体とも関係している。西は津和野藩主の命により、内地留学して研鑽を積んだため儒学に造形が深く、漢学の素養を要する語句を多用している（だからこそ、翻訳語を造語できたのである）。さらに、この杉田成卿に洋学を学んだため、後年、西が書いた「勅諭稿」（「軍人勅諭」の最初の草稿）は、漢文臭がすると批判されることになる。⁽³⁵⁾ 一方、津田真道は儒学のほかに国学も学んでいたのも、やまとことばもしばしば使っている。

勝海舟も榎本武揚も漢学・洋学を学んでいる。彼らは知識人や政治家、将校クラスの軍人など、リテラシーの高い階層に向かって自己の見解を述べたので、その文体は一般民衆の啓蒙を意図した福沢のような、平易なものではない。さらに実際の政策や法案を考える立場にあったため、批評家のような自由さがなく、まとまった著作を多数残したわけでもない。これらのことから研究が遅れているのは、無理からぬところもある。

さて、福沢はできるだけ漢語を使わずに、庶民が使っている和語に置き換えるべく、次のような文体を目指したという。

行文の都合次第に任せて遠慮なく漢語を利用し、俗文中に漢語を挿み、漢語に接するに俗語を以てして、雅俗めちやくに混合せしめ、恰も漢文社会の霊場を犯してその文法を紊乱し、唯早分りに分り易き文章を利用して通俗一般に広く文明の新思想を得せしめんとの趣意にして、乃ちこの趣意に基き出版したるは西洋旅案内、窮理図解等の書⁽³⁶⁾

漢語と和語を混ぜ合わせ、わかりやすい言葉で一般社会を啓蒙しようとする姿勢がうかがえる。その結果、書かれたのが『西洋旅案内』（慶応三年）や『訓蒙窮理図解』（明治元年）であった。

『世界国尽』についての緒言はさらに興味深い。明治二年刊行の『世界国尽』は、漢字仮名交じり文で振りがなつきである。「暴君汚吏の意にまかせ／下を抑えし悪政の／天罰通るゝところなく」（「支那」の一節）のように、七五調で五大陸の国々の説明を書き、暗誦できるようにした上、文字を大きな行書体にして寺子屋で手習い本として使えるようになっていた。⁽³⁷⁾ この文体であれば、明治五年の学制発布で全国に開校された小学校の教科書に採用されたのもうなづける。

福沢は緒言で「世界国尽は俗中の俗文、自分の目にも可笑しく見

ゆる程なれば、世間の儒流は無論、洋学社会にも必ず之を嘲り笑う者あるべし。(中略) 国尽の本書に不似合なる難解の英文字を齟齬して世間に示したらば、自から本書の重きを成すこともあらんかと思案の末、米国学士ワルブランク氏の一文を訳し、序文の代りとして巻首に掲げたり」と書いている。「俗中の俗文」たる七五調の本文と相反するかのよう、難解な英文の翻訳を冒頭につけたのは、本文の文体を儒学者や洋学者が嘲笑することを想定し、威厳をつけるためだと皮肉を述べている。⁽³⁸⁾ 現代の我々にとっても漢文を読むことは困難をとまなう。幕末維新期の学問状況と庶民のリテラシーのレベルを考慮すれば、福沢が説く文体論が重要だったことは理解できよう。

文体について、福沢がきわめて自覚的だったことは、先に論じた「学者の職分を論ず」「学問のすすめ」四編につづく五編の冒頭で、次のように記していることからわかる。

学問のすゝめは、もと民間の読本または小学の教授本に供えたるものなれば、初編より二編三編までも勉めて俗語を用い文章を読み易くするを趣意となしたりしが、四編に至り少しく文の体を改めて或いはむつかしき文字を用いたる処もあり。またこの五編も明治七年一月一日、社中会同の時に述べたる詞を文章に記したるものなれば、その文の体裁も四編に異ならずして或いは解し難きの恐れなきに非ず。畢竟四、五の二編は学者を相

手にして論を立てしものなるゆえ、この次第に及びたるなり。⁽³⁹⁾

かつて田口卯吉は『日本開化之性質——一名社会改良論』(経済雑誌社、一八八五年)で、西洋の学問が実学、すなわち「平民的の産物」であるのに対し、日本は「日常普通の言語を以て文章を記するが如きは卑野なり」として「凡俗に異なりたる文体を以て」文章を書いた、と述べた。そして「漢語は音を以て通じ難きもの多きが為に之を其儘に演説せんとすれば聴く者必ず解するを得ず、然れば則ち此文や尚ほ中等以上の余裕あるものに於てのみ学び得べきものにして貴族的の分子を含蓄するものと云はざる」を得ないので、ローマ字を導入すれば商工業・学問に便利だろうとしている。ローマ字導入はさておき、田口のこの言葉は、文体と学術の内容と社会階層とが密接に関連していることを示しており、福沢の文体論の意味がより明確に理解できよう。⁽⁴⁰⁾

おわりに

武家家臣団における門閥意識や差別意識を糾弾した『旧藩情』は、明治三四年二月三日に福沢が死去した四ヶ月後の六月に、また旧幕臣ながら新政府のもとで働いた勝海舟と榎本武揚に対し、武士としての生きざまを求めた『瘦我慢の説』は、福沢死去をはさむ二月に、そして西南戦争で最期を遂げた西郷隆盛を擁護した『明治十年丁卯

公論』は、死去する一ヶ月前の一月に、『時事新報』に連載され公表された。第一回帝国議会の開会から一年が経ち、日本が立憲君主制の近代国家を確立した後世の段階から、旧体制を批判した作品が人々の目にふれたのである。専制的・封建的な近世を批判し、近代の独立自尊の精神を説いた「文明開化の顔」という福沢のイメージの一部は、明らかに後世からの視線で作られていたと言えよう。⁽⁴¹⁾ 文明開化期の「近代的啓蒙」を考える際には、これらの旧体制批判が維新期の同時代的営みではなかったことを認識しておく必要がある。

明治三三（一九〇〇）年に中国で義和団事件が起こり、日本は派兵した。また、新渡戸稲造が英文で『Bushido: the Soul of Japan』を刊行したのも、同年である。この頃から武士道に関心が持たれるようになり、三八年の白露戦争時には、井上哲治郎・有馬祐政編『武士道叢書』上・中・下や秋山梧庵編『現代大家武士道叢論』が、博文館から出版された。⁽⁴²⁾ 武士としての生き方について西郷隆盛を擁護し、幕臣から新政府の官僚になった勝海舟と榎本武揚を批判する文章が、このような時期に公表されたのは、まさに「機を見るに敏」とも言える。武士道は江戸時代の幕藩体制下で培われたものだが、旧体制への批判と武士道称揚が、福沢の中でどのように関連づけられているのか、考察が必要である。

一方、福沢がわかりやすい文体で啓蒙書を次々に世に出したことの意味は、より評価されるべきだろう。文としての品格を保ちつつ、

原文に忠実に翻訳する杉田成卿とその門下たちへ、批判的姿勢をみせたことからわかるように、福沢は「江戸の洋学社会」に対する嫌悪感を持っていた。多少の誤謬は犠牲にしつつ雅俗混交の文、すなわち漢文と和文を混交させ、福沢言うところの「無知文盲」の民が、誰かに読んでもらって耳から聞いたときに理解できるように文体を、世に問うた功績は大きい。⁽⁴³⁾

当時の書き言葉は身分によって異なっていた。我々は得てして忘れがちだが、現在使っている日本語は、言文一致運動の成果としての言語である。江戸時代の学者は漢文を、武士階層は公文書や書簡で候文を、庶民階層は漢字に仮名でルビを振った、漢字仮名交じり文を主として使っており、雅俗の文体の違いは内容の違いの反映でもあった。陸軍卿などをつとめ、のちに首相にもなる山県有朋は、参謀本部長として『隣邦兵備略』（明治一四年刊行）の序文を漢文で書いている。⁽⁴⁴⁾ 武士であっても、序文や識語などを漢文で書くのは一般的であり、彼らの中には漢詩をたしなむ者もいた。漢文を読み下し文にして仮名交じりにしたところで、福沢が指摘したようにやはり難解である。候文よりも難字が多く、日常的に使われない言葉や、中国古典からの引用が随所にみられるからである。一方、明治一五年の「軍人勅諭」下賜後においても、軍隊に入隊した者の中には字がまったく読めない者がおり、将校たちは読み書きの指導までしたという。

その意味で、明治一ケタ代に福沢が刊行した書物のわかりやすさ

とは、日本語が共有されている段階で、使う漢字の数が少なく、難解な語句を使わないといったものではなかった。「国民」と「国語」がまだ成立していない時期に、全国の共通語構築への第一歩だったとさえ言えるのである。⁽⁴⁵⁾現代のような平準化された一般社会を無意識のうちに想定したまま、リテラシーの違いが著しい時期における「近代的啓蒙」の意味をとらえることはできない。明治政府が福沢没後に評価したのが、幕末維新期の啓蒙思想家としての実績であったのも、同時代感覚からすれば納得できる。

『学問のすゝめ』は「小学」を想定読者層として発売されたが、現代では齋藤孝訳『現代語訳学問のすゝめ』や岬龍一郎訳・解説『学問のすゝめ 自分の道を自分で切りひらくために』⁽⁴⁶⁾などが出版されている。興味深いことに後者の宣伝文句は、「武士道」の精神をもつて現実のなかでいかに生きるべきか。「和魂」の必要性を唱え、他人に頼ることなく、自らの力に依拠することの大切さを説いた日本の代表的名著をわかりやすく現代語新訳である。文明開化期の「近代的啓蒙」の象徴だった『学問のすゝめ』が、「武士道」精神、「和魂」の文脈で語られている奇妙な取り合わせは、これまでの検討からすれば根拠がないわけではない。

幕末維新期における公議公論とは、このような言語空間で展開されたものであり、日本の政体や国制に関する議論もまた、リテラシーの問題を認識することなしに理解することはできないのである。

注

- (1) 柳沢史明・吉澤英樹・江島泰子編著『混沌の共和国「文明化の使命」の時代における渡世のディスコース』（ナカニシヤ出版、二〇一九年）。
- (2) 谷口眞子「ジュール・ブリュネの箱館戦争荷担処分について―新政府の『万国公法』認識の一端―」『法史学研究会会報』第二三号（二〇二〇年）。
- (3) 尾佐竹猛『尾佐竹猛全集 第一巻 維新前後に於ける立憲思想』（実業之日本社、一九四八年）三三―三四頁。
- (4) 小泉信三「解題」福澤諭吉『学問のすゝめ』（岩波書店、二〇一二年）。なお、本書は一九四二年初版の改版である。以下、本論文ではこの『学問のすゝめ』を使用する。
- (5) 小川原正道『福澤諭吉の政治思想』（慶應義塾大学出版会、二〇一二年）序vii。本書は、福沢の書簡や交友関係があった人物がもっていた個人文書などを利用して、議会、憲法、天皇、外交、華士族、宗教、明治政府との確執について、福沢の思想を考察している。福沢については研究書・一般書ともに膨大な出版物があるため、近年刊行された数冊の研究書について以下、簡単に言及するのみとする。七人の論者による小室正紀編著『近代日本と福澤諭吉』（慶應義塾大学出版会、二〇一三年）は士族観、医学、政治・外交思想、法文化など、福沢の思想を多面的にとりあげた一般向けの書物である。西澤直子『福澤諭吉とフリーラヴ』（慶應義塾大学出版会、二〇一四年）は、近代社会における「家」と女性と家族のあり方をめぐる福沢の考え方を考察している。平山洋『MINERVA 歴史・文化ライブラリー』⁽³²⁾「福澤諭吉」とは誰か―先祖考から社説真偽判定まで―（ミネルヴァ書房、二〇一七年）は、福澤諭吉の長編論説について、原型ともいうべき単発の論説が先に発表されているが、原型の大部分が全集に未収録であり、原型掲載から刊行までの期間も不定であると指摘している。さらに平山洋『時事新報社主 福澤諭吉―社説起草者判定による論客の真実』（法律文化社、二〇二二年）によれば、福沢は『時事新報』に多くの社説を掲載して自己の見解を発表してきたが、どれが福沢の直接の手によるも

のかについては定かでない部分も多く、『全集』によってもその比定が異なっているという。なお、入手しやすい一般向けのものとして、池田勇太『福澤諭吉と大隈重信 洋学書生の幕末維新』（日本史リブレット人〇七六）（山川出版社、二〇一二年）と大久保健晴『今を生きる思想 福沢諭吉 最後の蘭学者』（講談社現代新書 二六九九）（講談社、二〇一三年）をあげておく。

- (6) もちろん西周については、大久保利謙編『西周全集』第一巻―第四巻（宗高書房、一九六〇―八一年）、津田真道については大久保利謙・桑原伸介・川崎勝編『津田真道全集』上・下（みすず書房、二〇〇一年）があり、それぞれに伝記も出版され、近年では大久保健晴『近代日本の政治構想とオランダ 増補新装版』（東京大学出版会、二〇一二年）なども刊行されているが、福沢諭吉と比較して研究者が少ないことは事実である。

- (7) 福澤諭吉『福澤諭吉著作集 第九巻 丁丑公論 瘦我慢の説』（慶應義塾大学出版会、二〇〇二年）所収の『瘦我慢の説』一一八―一二九頁。

- (8) 『同右』の坂本多加雄「解説」。

- (9) 注(8)に同じ。

- (10) 『同右』所収の「福澤先生の手簡」一二三〇頁、「勝安芳氏の答書」一三二頁、「榎本武揚氏の答書」一三二頁。

- (11) 福澤諭吉「学者の職分を論ず」前掲『学問のすゝめ』四二―四四頁。この言葉の裏には明治五年、長州藩の奇兵隊隊長だった横浜の貿易商、山城屋和助が生糸相場で失敗し、陸軍省公金の不正融資を受けて洋行した上、返済不能で自殺したという、陸軍省公金費消事件があるのかもしれない。

- (12) 『同右』四五―四九頁。

- (13) 『明六雑誌』では自由貿易論、内地旅行論などについても、メンバーの間で論争があったが、ここでは「学者職分論」に絞る。なお、明六社の正式な発足は同年二月であり、「学者職分論」をめぐる議論は明六社の位置づけにも関係している。吉田傑俊「近代日本思想論Ⅰ 福沢諭吉と中江兆民〈近代化〉と〈民主化〉の思想」（大月書店、二〇〇八年）では、「明

六社は「官民一体論」に立脚して微温的な文明開化を「官」側に立って推進するものであった」（六五頁）としている。

- (14) 横手通有「中公パックス 日本の名著三四 西周 加藤弘之」（中央公論社、一九八四年）。

- (15) 山室信一・中野目徹校注『明六雑誌』上巻（岩波書店、一九九九年）六六―六八頁。以下、山室ほか『明六雑誌』と略す。

- (16) 犬塚孝明『人物叢書 新装版 森有礼』（吉川弘文館、一九八六年）。

- (17) 山室ほか『明六雑誌』六九―七二頁。

- (18) 『同右』七三―七五頁。

- (19) 西周の反論については、渡部望「西周「非学者職分論」のディスクリール批評」『北東アジア研究』第一七号（二〇〇九年）が詳しい。

- (20) この書簡は昔、西のもとにしばらくいた、豊浦藩（長州藩の支藩、長府藩）の賀田貞一という人物を慶應義塾に入学させたいという依頼文で、冒頭の挨拶の中に、「兎角ブロードキンニクにて日々執掌罷在候に付、御無音打過申候」とみえる。「ブロードキンニク (brood winning)」はオランダ語で「パンの稼ぎ」、執掌は忙しく働いて暇がないことを意味する。生活するために忙しく働いて暇が無く、ご無沙汰しています、という挨拶である。慶應義塾『福澤諭吉全集』第二巻（岩波書店、一九六四年）三六〇―三六一頁。

- (21) 山室ほか『明六雑誌』七六―八二頁。

- (22) 平山洋「シリーズ・人と文化の探求⑧ アジア独立論者 福沢諭吉―脱亜論・朝鮮滅亡論 尊王論をめぐって―」（ミネルヴァ書房、二〇一二年）四八―四九頁。

- (23) 前掲『学問のすゝめ』五一―五二頁。

- (24) 松沢弘陽『福澤諭吉の思想的格闘―生と死を超えて―』（岩波書店、二〇一二年）第六章「民情一新」覚え書―官民調和論との関係において―。

- (25) 大久保利謙『明六社』（講談社現学術文庫 一八四三）（講談社、二〇〇三年）、「民間雑誌」『国史大辞典』。

(26) 梅溪昇『人物叢書「新装版」二八四 緒方洪庵』(吉川弘文館、二〇一六年)。

(27) 「杉田成卿」『日本大百科全書』。

(28) 『福澤全集緒言』(『福澤論吉著作集 第二卷 福翁自伝 福澤全集緒言』(慶應義塾大学出版会、二〇〇三年) 所収の緒言。四一〇～四一二頁。以下、緒言については本書から引用する。

(29) 杉田成卿著、大槻修二編『梅里餘稿』(杉田盛發行、一八八五年)。東京府士族の杉田盛は杉田成卿の孫である。

(30) 前掲『福澤全集緒言』四一二～四一三頁。

(31) 『同右』四一四頁。

(32) 福澤論吉「明治十八年四月四日梅里杉田成卿先生ノ祭典ニ付演説」。前掲『梅里餘稿』所収。本書の最後には、梅里先生年譜(大槻修二著)と杉田成卿二十七回忌の祭典紀事が付されている。寺島宗則、神田孝平、箕作麟祥、加藤弘之、杉亨二、勝海舟、福沢論吉など六三人のうち、当日来られなかった者が一〇人余りいたが、錚錚たる顔ぶれであった。

(33) 石井紫郎校注『近世武家思想』(日本思想大系二七)(岩波書店、一九七四年)。

(34) 竹本知行『大村益次郎 全国を以て一大刀と為す』(ミネルヴァ書房、二〇二二年)。

(35) 谷口眞子「軍人勅諭」再考―西周「勅諭稿」との比較を通じて―『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第六四輯(二〇一九年)。

(36) 前掲『福澤全集緒言』四一三頁。

(37) 福澤論吉著・中川眞弥編『福澤論吉著作集 第二卷 訓蒙窮理図解 世界国尽』(慶應義塾大学出版会、二〇〇二年)。

(38) 前掲『福澤全集緒言』四六〇頁。

(39) 前掲『学問のすゝめ』五三頁。文中の「社中会同」とは、慶應義塾の会同のことである。

(40) 田口鼎軒『明治文学全集一四 田口鼎軒集』(筑摩書房、一九七七年)

所収、八一～八三頁。

(41) 福澤論吉著、山本博文訳『現代語訳 福澤論吉 幕末・維新論集』(ちくま新書九五二)(筑摩書房、二〇一二年)は、『旧藩情』『瘦我慢の説』『明治十年丁丑公論』『士人処世論』を現代語訳しているが、このような側面に切り込んだ解説はなされていない。

(42) 谷口眞子「葉隠(武士道)の史的研究」(吉川弘文館、二〇二二年)。

(43) 文体については、福地校痴「文論」「文章論」加藤周一・前田愛校注「文体」(日本近代思想大系一六)(岩波書店、一九八九年)にみられるように、その後も問題となった。なお、松沢弘陽『前掲書』第四章「公議輿論と討論のあいだ―福澤論吉の初期議会政観―」では、話し言葉の観点から福沢の演説・討論を検討している。

(44) 谷口眞子「一八八〇年における西周の国際情勢認識―「上隣邦兵備略表」の分析―」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第六六輯(二〇二二年)。

(45) 石井雅巳「翻訳と日本語―西周の言語哲学―」『北東アジア研究』第二九号(二〇一八年)は、なぜ西周は漢字で西洋語の翻訳を行う一方、漢字廃止論を著したのかについて、西の漢字廃止論は言文一致体の国語・国字の創設を目指し、その障害となる雅俗分離の無力化を狙ったものであると考えている。

(46) 福澤論吉著、齋藤孝訳『現代語訳学問のすすめ』(ちくま新書七六六)(筑摩書房、二〇〇九年)、福澤論吉著、岬龍一郎訳・解説『学問のすすめ 自分の道を自分で切りひらくために』(PHP研究所、二〇〇四年)。

【付記】

本論文は、二〇一九年度～二〇二三年度科学研究費補助金・基盤研究(A)(研究代表者・谷口眞子)「一九世紀を中心とした軍事的学知をめぐる人と書物の交錯」(研究課題番号一九H〇〇五四七)による研究成果の一部である。